

博士学位論文審査要旨

2015年1月20日

論文題目： 初期ユダヤ教と原始キリスト教団における解釈と受容
— 「霊」と「天使」の概念の変遷を辿る —

学位申請者： 大澤 香

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 神学研究科 教授 原 誠

副査： 神学研究科 教授 水谷 誠

要 旨：

本研究は、初期ユダヤ教時代に発展したと考えられる概念に焦点を当て、その概念の変遷を、初期ユダヤ教と原始キリスト教団それぞれにおける「読者」による聖書の解釈と受容の観点から解明しようとするものである。これによって、初期ユダヤ教の中の一セクトとして誕生し、後に独自の発展を遂げた原始キリスト教団が、初期ユダヤ教を継承しつつも示した「転換」の形態を明らかにすることができるのである。(本論文では、「初期ユダヤ教時代」とは第二神殿時代を指す。また、「原始キリスト教団」とは、初期ユダヤ教内のイエス＝キリスト派の時代から後1世紀末頃までのイエス＝キリスト教信仰者の共同体を指す。)

1章では聖書学の方法論の検討がなされる。歴史批評的な方法や、通時的か共時的かの二項対立的な考え方に対して、「読者」の側の受容と解釈によって「著者の意図」と「読者」との間に第三の「テキストの意味」の生じることが指摘される。「読者」の受容と解釈によりその都度新たに生まれる「テキストの意味」に注目することで、同じテキストを共通に持つ初期ユダヤ教と原始キリスト教団の関係と差異も柔軟に捉え直すことができる。

2章では初期ユダヤ教の時代状況が考察される。神殿および犠牲儀礼の相対化と並行して多くのセクト運動が生起した。神殿に代わる「聖性」や「信仰」の内実を問うこれらの運動は、「聖霊」と「天使」概念を発達させることになる。クムラン共同体には「聖なる霊」によって罪から清められ、神の秘儀も理解できるようになるという認識があり、このような「霊化」と「内面化」が原始キリスト教団に継承されていく。また、トビト記の解読を通して、初期ユダヤ教に特徴的な「透かし絵 (allusion)」の技法が考察される。

3章では、原始キリスト教団の聖書解釈がパウロとルカ文書に焦点を当てて考察される。パウロは、初期ユダヤ教における信仰の内実の重視と儀礼の「霊化」の動きを受け継ぎ、「律法」や「ユダヤ人」の概念を「内面化」・「霊化」したと考えられる。さらに、トーラーを授与された「ユダヤ人」の概念も、全世界の人間へと「普遍化」されるに至るのである。ルカ文書の場合は、透かし絵の手法を用いて、神からのイスラエルの民への律法の授与、また、初期ユダヤ教セクトメンバーへの「聖なる霊」の授与に重ねながら、「異邦人をも含む民への聖霊の授与」を描いていることが明らかになる。ルカの物語世界では、「聖霊」、「天使」、「光」などの初期ユダヤ教のモチーフが柔軟に受容され、「神の言葉が与えられた民族」から「神の言葉を理解する民」へと事柄の重点が移っていることも考察される。

本研究は受容と解釈の視点を聖書学の従来の方法論の中に適切に設定することによって、原始キリスト教団の聖書解釈と初期ユダヤ教の聖書解釈との関係をより立体的に捉えることを可能

にすると共に、「解釈」の意義が現代においても減ることがないことを示しており、聖書解釈史と解釈学双方に資するものとして高く評価することができる。よって、本研究は、博士（神学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2015年1月20日

論文題目： 初期ユダヤ教と原始キリスト教団における解釈と受容
— 「霊」と「天使」の概念の変遷を辿る —

学位申請者： 大澤 香

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 神学研究科 教授 原 誠

副査： 神学研究科 教授 水谷 誠

要 旨：

大澤香氏は、2008年3月、同志社大学大学院神学研究科博士課程前期課程を修了し、日本基督教団倉敷教会にて担任教師として奉職したのち、2011年4月、後期課程に入学し、所定の要件を満たして2014年9月に学位論文を提出した。2015年1月20日(火)午後1時より、神学研究科委員会は大澤氏に対して約2時間の総合試験を実施し、氏から十分な聖書神学的素養を背景にした的確な応答を受け、氏が学位請求論文の主題領域について深い洞察を有していることを確認した。研究に必要な語学力については、博士論文執筆のためのヘブライ語、ギリシア語、英語、ドイツ語の文献を正確に読みこなしていることにより十分なものと認められる。

以上の結果により、総合試験に合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 初期ユダヤ教と原始キリスト教団 における解釈と受容
- 「霊」と「天使」の概念の変遷を辿る -

氏名： 大澤 香

要 旨：

本研究は、初期ユダヤ教時代に発展したことが考えられる「霊」と「天使」の概念に焦点を当て、初期ユダヤ教・原始キリスト教団それぞれのコンテクストにおける「読者」の視点を想定しつつ、そこでの聖書の解釈と受容の形態を明らかにすることを目的としたものである。

初期ユダヤ教に多数存在したセクトの中の一つとして誕生し、後に独自の発展を遂げた原始キリスト教団が、初期ユダヤ教を「継承」しつつも、何らかの点での「転換」を経験したことを、初期ユダヤ教・原始キリスト教団それぞれの読者がどのように聖書を読んだのかという「解釈」の視点から明らかにすることを試みた。また「読者」の視点を正しく設置することによって、従来指摘されてきた聖書学の方法論の偏りの問題についても解決の視点を提示した。以下にその要旨を記す。

1章では聖書学の方法論としての歴史批評への問題提起、通時的視点か共時的視点かの二項対立的捉え方の問題点を、「テキストの意味」が著者の意図（M1）と読者（M2）との間に生じる第三の意味（M3）であるという「解釈・受容」の視点から分析した。この視点からは、方法論の偏りの問題は解釈が成立する上記の構図を正しく捉えていないために生じるものであることが示された。聖書テキストの聖典化の過程で「より完全な意味」が探し求められ、諸々のテキストが共に読まれるようになったと Smith がその起源を指摘する「解釈」の営みの延長線上に、キリスト教徒による「二次的な読み」も位置付けられることを確認し、初期ユダヤ教・原始キリスト教団による解釈の具体的な検討へと入って行った。

2章ではまず初期ユダヤ教の時代状況を確認した。この時代は捕囚後に再建された神殿とモーセ五書（トーラー）を柱とする改革が行われ、モーセ五書の絶対的な重要性のもとにありながらも、それへの関心の高まりからかえって多種多様な解釈が生み出された時代であった。この時代の状況として、ヘレニズム化の影響を受けた神殿体制とその「聖性」が問題とされ、その中から多くのセクト運動が起こっていったこと、ユダヤ人と異邦人との明確な区別が構築されつつも、ユダヤ人の中でも「聖性」や「信仰」の内実が問われた時代であったこと、異邦人との関係は特にディアスポラのユダヤ人の中で切実な問題であったこと、神殿から離れていたディアスポラとセクトグループにおいて、神殿での犠牲儀礼に代わる儀礼と信仰の形態が発達したことが確認された。このような時代状況のもとで、ユダヤ教セクトグループの信仰形態の特徴として、「聖霊」と「天使」の概念の発達があったことが報告された。死海文書の用例からは、モーセ律法の研究と共同体の掟の遵守が共同体の成員に求められる絶対条件であり、その共同体の成員には共同体に与えられた「聖なる霊」によって罪から清められているとの認識および神の「聖なる霊」によって神の秘儀を理解することができるようになるとの認識があったことを確認した。更に死海文書の用例から、セクトメンバーの間に天使たちとの密接な交わりの意識があったことが Elior の報告に基づきつつ指摘された。そこには当時の神殿体制から遠ざけられたセクト祭司たちが自分たちの正統性を主張し、神殿での祭司の務めに代わるものとして「天使たちと共にある礼拝」に熱心であったことが考察された。クムラン共同体が主張した太陽暦は太陰暦を採用していた神殿体制に対抗するものであると考えられ、天的存在との共同はその正統性が神からのものであることを裏付ける機能を担っていた可能性を提示した。

またクムラン共同体において入会時および毎日の「聖化」儀礼としての「浸水儀礼（洗礼）」が発達したコンテクストと原始キリスト教団の洗礼との関係を考察した。そこではエルサレム神殿から離れた状況下で、神殿での犠牲儀礼に置き代わる聖化儀礼として洗礼が発達したことが、礼拝概念の「霊化」の動きとして報告された。そしてこの礼拝概念の「霊化」と内面的な悔い改めの重視を、原始キリスト教団が継承した経緯を考察した。またユダヤ教セクトでは入会時のみでなく日々繰り返される儀礼であった洗礼が、原始キリスト教団では、イエス＝キリスト信仰に入る際の「入会」儀礼の側面が前面に出てきていることも報告された。

また初期ユダヤ教に特徴的な文学技法として *allusion* の技法の特徴を考察した。*allusion* は読者に下地となるテキストを想起させつつ、テキストと読者との間に成立する「多様な意味」を読者自身に探求させる、「洗練された文学的仕掛け」であった。トビト記の考察において、このような「読み」の構造を具体的に提示した。更にトビト記や新約聖書で「光の喪失と回復」のテーマが重要なモチーフであることの背後には、初期ユダヤ教において「光」が祭司の伝統の中で特別な意味を持っていたこと、「トローラーは光である」との解釈とも関連していることが考えられ、原始キリスト教団における解釈と律法（トローラー）との関係の再検討の必要性が確認された。

3章では、原始キリスト教団の聖書解釈をパウロとルカに焦点を当てて考察した。パウロについてはその言説がキリスト教によるユダヤ教の律法主義批判の根拠とされてきた経緯があり、彼が「霊」と「肉」の概念と共に「律法」をどのように捉えていたのかを再検討した。その考察から、パウロの言う「肉」は塵に帰るべき人間存在が意味されている場合と、神に敵対する人間の罪が意味されている場合とがあることが明らかになり、これらはクムラン共同体に確認された「肉の霊」の二つの意味と重なっていることを指摘した。一方パウロの「霊」は「肉」と対照的な神に属する永遠の命を表しており、それが「霊 - 神の律法 - キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則」として認識されていることを提示した。更にパウロが頻繁に言及する「神の子に変容する信仰者たち」の概念には初期ユダヤ教神秘主義の認識との共通点が指摘される点、パウロの「霊」と「肉」の概念には「天使（神の子）」と「墮落天使」の概念との重なりが指摘される等の点で、パウロは初期ユダヤ教の解釈伝統を継承していることを確認した。パウロの言葉遣いに見られる「律法」や「ユダヤ人」の「内面化・霊化」も初期ユダヤ教における信仰の内実の重視と儀礼の「霊化」を継承するものと考えられる一方で、パウロにおいてはこの「内面化・霊化」が徹底され、律法を授与されたユダヤ人の概念を全ての人間へと拡大する「普遍化」が起こっていることが確認された。

次に原始キリスト教団の聖書解釈としてルカ文書の分析を行った。伝統的には異邦人キリスト者のために著作した異邦人の著者と言われてきたルカは、近年の研究ではそのユダヤ的・黙示的特徴が確認されている。ルカが初期ユダヤ教を「継承」している点として、ルカが聖霊の授与とトローラーの授与とを重ねている点、*allusion* の技法を用いて物語を記述している点を指摘した。その分析からは、ルカがモーセ五書の天地創造とノアの物語での全ての人間への祝福を *allude* させつつ、異邦人にも神から「聖霊」が与えられたことを、シャブオットの日にイスラエルにトローラーが与えられた出来事と重ねながら描き出している可能性が指摘された。ルカの「人の子」の用法からは、ルカが「高举」のキリストに重点を置いていることが考えられ、「完全な神でありつつ、完全に人間であるイエス＝キリスト」の位置の理解のために「天使形態」の概念が有益であることが提示された。ルカの描き出す新しい世界を、下地となるテキストとの厳密な対応関係として「証明」することは困難であっても、「柔軟な受容」の観点から見ることで、ルカが受容した世界が、下地となるテキストの上にもどのように成立しているのかを示すことが可能となった。「柔軟な受容」の視点からは、ルカは「聖霊」「天使」「光」「稲妻」などのモチーフを「イメージの連鎖」として受け取っていると考えられ、それらのイメージはシナイ山でのモーセへの律法授与（出 19 章）にまつわるイメージであることが指摘された。またルカの描く物語で「光の喪失と回復」が重要なモチーフであることから、ルカがユダヤ教の「光＝神の言葉（教え）」

との理解を継承しつつ、その光（＝神の言葉、教え）が「民にも異邦人にも」（使徒言行録 26:23）告げられるものであると解釈していることが提示された。ルカにとって「聖霊が与えられる」ことは「神の言葉が理解できるようになること」であり、異邦人にも神から聖霊が与えられたことを描くルカは、「異邦人であっても神の言葉が理解できるようになること」を描こうとしたことを指摘した。

以上の考察から、原始キリスト教団の聖書解釈としてパウロによる解釈とルカによる解釈とがそれぞれにユニークなものでありながら、結果としては双方とも「異邦人も神の言葉を受ける対象に含まれる」との解釈に至っていることが明らかとなり、この点が原始キリスト教団にとってユダヤ教から独自の宗教へと分岐するに至った「転換点」であったことを提示した。本研究は「受容・解釈」の視点を聖書学の従来の方法論の中に適切に設定することによって、原始キリスト教団による解釈の成立とその特徴とを、初期ユダヤ教の聖書解釈との関係と歴史状況の中でより立体的に捉えることを可能にした点、および「解釈」という行為そのものの意義が現代においても減ることがないことを示した点で、聖書解釈史と解釈学双方の研究に資するものであると考える。